

## 西行の「六道哥」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金, 任仲 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/7316">http://hdl.handle.net/10291/7316</a>

# 西行の「六道哥」について

A Study of Saigyō's "ROKUDŌKA"

博士後期課程 日本文学専攻 一九九五年度入学

金 任 仲

Imjung KIM

## 一 はじめに

西行の『山家集』中、雑部のなかには、「六道哥よみけるに」という詞書とともに、六道歌六首が収められている。<sup>①</sup>六道とは、衆生が生前に自ら作った業によって生死を繰り返す六つの世界、すなわち、地獄・餓鬼・畜生・修羅（阿修羅とも）・人間・天のことをいっている。そこでまず、『山家集』から六道歌を前もって掲げると、次の通りである。

### 地獄

① つみ人のしぬるよもなくもゆるひのたぎどなるらんことぞかなしき

(八九七)

### 餓鬼

② あさ夕のこをやしなひにすときけばくにくすぐれてもかなしかるらん

### 畜生

③ かぐらうたにくざとりかうはいたけれど猶そのこまになることほう

し (八九九)

### 修羅

④ よしなしなあらそふことをたてにしていかりをのみもむすぶ心は

(九〇〇)

### 人

⑤ ありがたき人になりけるかひありてざとりもとむる心あらなん

(九〇一)

### 天

⑥ くものうへのたのしみとてもかひぞなきさてしもやがてすみしはて

ねば (九〇二)

このように、右に掲げた西行の六道歌は、作歌年代が明らかでない歌群である。この作歌年代について、久保田淳氏は、内乱を経験した西行が出家者の立場で詠まれたそのような釈教歌の類として、「もつとも、詠まれた時期は大部分不明である。保元の乱以前の作も混じっているかもしれない。」<sup>(2)</sup>とされ、保元の乱(一一五六)前後の作品であると推定されている。

西行の六道歌の他にも、同時代の寂然、良経、慈円も、六道の迷いの世界に、声聞、縁覚、菩薩、仏の四つのさとりの世界を加えた十界の歌を詠んでいる。その十界詠は、それぞれ『唯心房集』(書陵部蔵本)に「十法界」と題して十一〜二〇番に、『秋篠月清集』(定家本)に「十題百首」のうち、「釈教十首十界」として二九一〜三〇〇番に、『拾玉集』(書陵部蔵本)に「春日百首草」のうち、「十界」として、二七四三〜二七五二番に収められている。なお、三人ともに天台の十界互具の思想に基づいて、「十如是」<sup>(3)</sup>の歌も詠んでいる。ここで、注意しておきたいのは、寂然、良経、慈円の十界詠と十如是詠が、それぞれの家集に収められているのに対し、西行は六道歌のみ詠まれているわけである。これについては、後述することにする。

本稿では、西行の六道歌を中心として、經典類及び他の文学作品に見える六道思想とを照合しながら、寂然、良経、慈円の十界詠のうち、六道詠を結びつけて考察して行きたいと思う。

## 二 「六道思想」について

まず、西行の六道歌の検討に入る前に、經典類と文学作品に現れてい

る六道思想が、どのように受容され、描かれているのかについて、触れておきたい。

六道思想は、もともと仏教に先立って古代インドで生まれたが、阿修羅を除いた五道輪廻を説くことが多く、それは五趣生死輪廻図<sup>(4)</sup>が描かれたということからも知られる。それが、徐々に仏教にも受容され、『法華經』の序品で「諸世界中 六道衆生」<sup>(5)</sup>と説いて、釈迦が六道の衆生の姿を示したが、六道思想の背景には法華經信仰とともに、觀音による六道救済が考えられ、世に広まって行ったということである。經典を見ると、阿修羅を除いた五道だけを説いている場合が多く目立つ。例えば、『大方等大集經』に「所謂五道衆生」とし、世親の『俱舍論』分別世品には「地獄傍生鬼 人及六欲天(中略) 自名說二五趣一」とするのである。ここで、「傍生」は「畜生」であり、「鬼」は「餓鬼」のことを指している。また、『大乘理趣六波羅蜜多經』卷三、『瑜伽師地論』卷四、『順正理論』卷二なども、同じく五趣と三界を結びつけて説いている。<sup>(6)</sup> こうした、五道説を説いている經典に対して、『大智度論』卷三十には次のような問答が見える。

問曰。經說有<sub>レ</sub>五道。云何言<sub>レ</sub>六道。答曰。仏去久經流遠。法伝五百年後。多有<sub>二</sub>別異<sub>一</sub>部部不<sub>レ</sub>同。或言<sub>レ</sub>五道。或言<sub>レ</sub>六道。若說<sub>レ</sub>五者。於<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>仏經<sub>一</sub>廻<sub>レ</sub>文說<sub>レ</sub>五。若說<sub>レ</sub>六者。於<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>仏經<sub>一</sub>廻<sub>レ</sub>文說<sub>レ</sub>六。又摩訶衍中法華經說<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>六趣衆生<sub>一</sub>。觀<sub>二</sub>諸旨<sub>一</sub>應<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>六道<sub>一</sub>。<sup>(7)</sup>

六道とすれば、地獄、餓鬼、畜生の三惡道と、阿修羅、人、天の三善

道にそれぞれ三つに分かれるが、五道だと善道が人、天二つしかないの  
で、上中下に区別できないとして、六道をよしとされ、その根拠として  
『法華経』が説く「六趣衆生」を取り上げているのである。中国や日本  
においては、大乘仏教の影響から六道説が一般に普及しており、五道説  
はあまり見られないのである。また、平安中期以後六道思想の普及に最  
も大きな影響を及ぼしたのは、やはり源信の『往生要集』であったら  
う。その巻頭の「厭離穢土」で描かれた六道についての記述は、様々  
な經典からの引用であり、六道のなかでも三悪道の生々しい描写は、当  
時の人々に現世における罪科の恐ろしさを認識させたのに違いない。

そして、その『往生要集』のなかの六道に関する記述部分を、眼に見  
えるような形で示したのが絵画であった。『六道絵相略縁起』（聖衆来迎  
寺蔵）の序文によると、

抑モ此ノ絵相ノ由来ヲ尋ヌレバ、恵心僧都、末世ノ愚悪ノ凡夫ノ為  
ニ、厭離穢土ウツシツ欣求浄土ノ経教及ヒノ諸口ノ経論ノ中ヨリ、勸要ノ文意  
ヲ取集メ三卷トノナシ、往生要集ト名ツケテ、専ラ易行念仏ヲ弘ウツク道勸  
ノ進シ玉フ、(中略)時ニ我朝円融院ノ御覧覽ニ献ヘ玉フ、ムベナル  
哉ナ、帝尊信ノ余リ女后婦人ノ為ニ此書ノ事相ヲ絵ニ顯サントノ御  
召レ思、即チ恵心僧都ニ談シ、是代天下ニ名在ル巨勢金岡ニ命シ、  
恵心都レ僧指揮シテ図画シ奉リ玉ヘリ、<sup>(8)</sup>

と記して、円融法皇の勅により、『往生要集』大文一「厭離穢土」の  
内容に依拠して図絵されたものが聖衆来迎寺の十界図（六道絵とも呼ば

れる）であり、この絵を契機として、その以後様々な六道絵が描かれる  
ようになる。現存するものとしては、聖衆来迎寺の十界図、禅林寺の十  
界図、蓮華王院の六道絵などがあり、その他に『地獄草紙』『餓鬼草紙』  
『病草紙』<sup>(9)</sup>などが伝えられている。西行の六道歌も当然ながら、『往生要  
集』がもつ六道のイメージや、六道絵、十界図に触発されて詠まれたも  
のであると推測されるが、それは、西行だけではなく、寂然、良経、慈  
円の十界詠でも、しばしば共通の認識や描写が見られるのである。

ここで、平安、鎌倉時代の文学作品に語られる六道思想について少し  
言及しておきたい。六道思想の全体を取り扱う場合は、やはり六道輪廻  
が語られることが多く目立つ。例えば、『日本霊異記』上、第二に「畜  
生を見ゆると雖も、而も我が過去の父母なり。六道の四生は、我が生ま  
れし家なり。故に、慈悲无くあるべからず。」とあり、『三宝絵詞』下、  
卷二六にも「六道衆生ハ皆是先世ノ我父母也。」と見られる。また、『沙  
石集』に衆生が六道に生死を繰り返して、その眠りから目覚めないこと  
を「六道の長夜の夢」とする。『平家物語』の灌頂巻は、建礼門院が自  
己の一生を回顧しながら、「六道の沙汰」と題される章段で、自分は現  
世において六道の世界を見たと言語している。和歌の方を見ると、「むつ  
の道」として次のように詠まれている。

あさましやちよの法にもあはずして六のみちにもまどひぬる哉

（散木奇歌集・九一九）

今はよもまどひすて、し六の道にかへらじものを五相成身

（拾玉集・二〇八〇）

思ひとけば心につくる六の道をいとふぞやがてまどひなりける

(後鳥羽院御集・一〇八五)

六の道よつのちまたのくるしみをいつかかはりてたすけはつべき

(玉葉集・行円・二六三七)

六の道四のすがたにさすらひてはじめもはてもしらぬかなしき

(新千載集・澄覚法親王・八二二)

「六の道」は、おおよそ苦界の世界であると詠み込まれており、その苦界から早く厭い離れるべきものとして、受け入れられているのである。

### 三 「六道歌」の解釈

今までは、六道歌が詠まれるようになったその時代的背景と経典類と文学作品、そして和歌に見える六道思想について述べてきた。次に、本稿の目的である六道歌の検討に移りたい。

#### 地獄

①つみ人のしぬるよもなくもゆるひのたきよなるらんことぞかなしき  
罪人が死んで生まれ変わる世もなく、生前の業によって地獄の炎々たる業火の薪となって燃え続けるのを思うと、ほんとうに悲しい。

題の「地獄」は、早く六道から独立して文学作品や絵画などに取り扱われてきた。地獄の思想は、紀元前三千年の頃にチグリスユーフラテス河流域に栄えたシュメール族の間に起こり、紀元前七〜八世紀の頃に

インドに移入されたという。仏教にも早くから地獄の思想が導入され、特殊な地獄名の下に因果応報の業報思想のなかに包括された<sup>(10)</sup>ということである。

地獄を説いている各種の経典は数多くあるが、それぞれによって、若干のくい違いを見せている。『大智度論』や『仏祖統記』のように、「地獄有<sup>レ</sup>三。一熱。二寒。三辺。」と説いて、「熱」は八熱地獄、「寒」は八寒地獄、そして「辺」は「三辺地獄者有<sup>レ</sup>三。山間水間曠野。受<sup>レ</sup>別業報」。此<sup>レ</sup>応<sup>レ</sup>寒熱雜受<sup>二</sup>と三分するものもあれば、『阿含経』のように熱地獄を八大地獄とし、寒地獄は八大地獄に附属する十六の別所として包含させているものもある。それが、時代が下るにつれ、『正法念処経』『俱舍論』などにおいては、八大地獄・八寒地獄、さらに附属する小地獄の名と、それらの各地獄における苦悩に関する詳細な描写が見られるようになった。しかし、日本人によく知られているのは、熱地獄の八大地獄であって、八寒地獄のほうはあまり馴染みがない<sup>(11)</sup>のである。

ここで、『往生要集』における地獄描写を見てみると、八大地獄でも最も苦しみ多い阿鼻地獄(無間地獄とも)を、『瑜伽師地論』『俱舍論』『正法念処経』などによって説き終った後に、八寒地獄については「また頰部陀等の八寒地獄あり。具さには経論の如し。これを述ぶるに違<sup>た</sup>あらず<sup>(12)</sup>。」と記すのみで、地獄の記述を終えている。

ところが、藤井智海<sup>(13)</sup>氏の言われるように、『往生要集』は八寒地獄の事はあまり触れていないが、文学作品において八寒地獄はよく引用されている。例えば、『今昔物語』巻六の三四語に八寒地獄の七番目である「紅蓮地獄」の名が見え、謡曲の『歌占』『阿漕』などにも用いられてい

る。それはまた、後述する良経の地獄の歌でも詠み込まれている。ただ、『二十五三昧式』『六道講式』には、「願へ焦熱大焦熱之中。紅蓮大紅蓮之間。放<sub>チ</sub>遍照之光明<sub>ヲ</sub>。速<sub>ニ</sub>引<sub>ニ</sub>導<sub>シ</sub>タマ、受苦之衆生<sub>ニ</sub>。」<sup>(14)</sup>と、『六座念仏式』は、「八寒八熱那落伽<sup>(15)</sup>」というふうに、八大地獄と八寒地獄とを並行して語っている。

その他、『往生要集』の中には見出されない、地獄の異名もある。例えば、『今昔物語』巻九の十六語に「孤地獄」「灰地獄」、「源平盛衰記」には「峨々たる剣山」、お伽草子『毘沙門の本地』には、「八万地獄」「橋慢地獄」とあり、謡曲の『歌占』にも「斬鎚地獄」「剣樹地獄」「石割地獄」「火盆地獄」等の異名の地獄を、見出すことができるのである。

当時の社会において、地獄という観念が発達してくるのに、地獄絵と地獄屏風の存在はけっして馴染みの薄いものでなかった。『枕草子』八一段は、仏名会の翌日に帝が持って来させた地獄絵の御屏風を、清少納言は見るのを怖がって部屋に逃げかくれた体験を記したもので、地獄屏風の絵は女性にとって、目をそむけたいような残酷なものであったことが窺われる。この地獄屏風に、どのような地獄の光景が描かれていたのか、詳しいことはわからないが、家永三郎氏<sup>(17)</sup>は地獄屏風の絵の様子をほこ具体的に示すものとして、『古今著聞集』に「楼の上より梓<sub>ササ</sub>をさしおろして人をさしたる鬼」の姿を地獄屏風に描いたという話を挙げられている。

和歌の詞書にも、「地獄絵につるぎのえだに人のつらぬかれたるを見てよめる」(金葉集・雑下・六三六・和泉式部)や「(前略)地ごくゑを、人々よむに、十八日つるぎに人のつらぬかれたるを」(弁乳母集・

一五)などは、衆合地獄の刀葉の木に登る罪人の姿を見たものであろう。その他、「ちごくゑに、はかりに人をかけたるを見て」(赤染衛門集・二六七)があり、「地獄の絵に、しでの山を女の鬼におはれてなきてこえたるかたかきたるをみて」(新統古今集・二条院宣旨・八五八)などがある。西行の『聞書集』にも、「地獄多を見て」<sup>(19)</sup>(一九八〜二二四)という詞書を含む大連作が載せられており、八大地獄の一つ一つ的情景を二七首に詠んでいるのである。この他、『日本霊異記』などの説話に出てくる地獄話は数多くあるが、ここでは文学作品のなかで、西行の歌と関連するところを取り上げただけである。

①の歌へ戻って見ると、初句の「つみ」は、「罪」と「積み」を掛けている。また、「積み」は四句目の「薪」の縁語となっている。罪人が薪となって猛火に焼かれる有様を、実際『地獄草紙』の「雲火霧」<sup>(20)</sup>に見ると、猛火が地獄の中に燃えており、獄卒は罪人をとらえて火中へ投げ入れると、罪人の身体は焼け溶けてしまうという、惨たらしい光景を描いている。『往生要集』は「遠く大焦熱地獄の普く大炎の燃ゆるを見、また地獄の罪人の啼き哭ぶ声を聞く。」というように表現しており、西行の歌も八大地獄の七番目の大焦熱地獄を詠んでいることを考えれば、これに拠ったものであろう。また、『正法念処経』巻十一にも「何況地獄焼 如焼乾薪草 火烧非是烧 恶業乃是烧 火烧則可滅 业烧不可滅」というように、説かれている。

二句目の「しぬるよもなく」は、解釈が問題になっている句である。陽明文庫本は「しぬるよもなく」、六家集板本では「しめるよもなく」とするが、従来の注釈は概ね六家集板本の「しめるよもなく」によっ

て、解釈されている。これについて、久保田淳氏は、「地獄とは罪人が獄卒のために幾度となく殺されては生き返らせられるという責苦が無限に続く世界なのである」<sup>(22)</sup>から、「しぬる世もなく」の本文に就くべきであると指摘されている。『往生要集』にも、八大地獄のうち一番目の等活地獄の描写で、「或は獄卒、手に鉄杖・鉄棒を執り、頭より足に至るまで、遍く皆打ち築くに、身体破れ砕くること、猶し沙揣<sup>しやだ</sup>の如し。(中略)獄卒、鉄叉を以て地を打ち、唱へて「活々」と云ふと。」というように、罪人は永遠に生き返らせられて責苦に直面することを語っているのである。ここで、寂然、慈円の地獄の歌を見ると、

こゝろからおのがつみおくだきともてこりねと身をもやくほむらかな  
(寂然・一一)

つちのしたにもえてもゆるたけき火をいかなる人の思けつらん

(慈円・二七四三)

とあり、寂然の歌の「つみ」は「積み」と「罪」の、「こりね」は「憔悴」と「懲り」の掛詞と、技巧の勝った歌だが、下句「こりねと身をもやくほむらかな」は、謡曲の『恋重荷』で「浅間の煙、あさましの身や、衆合地獄の、重き苦しみ、さて懲り給へや、懲り給へ。」と、似たような表現が見える。また、慈円の「つちのしたに」は、『往生要集』に「閻浮提<sup>えんぶだい</sup>の下、一千由旬にあり。」というように、我々が住んでいる人間世界の地底に地獄があると信じられてきたからであろう。

このように、二人とも西行の作と似た発想で八熱地獄を詠んでいるの

に對し、良經の歌は、

もゆるひもとづるこほりもきえずしていくよまどひぬながきよのやみ  
(良經・二九一)

と、八大地獄と八寒地獄を對句にして詠み込んでいる。二句目の「とづるこほり」は、謡曲の『歌占』に「紅蓮大紅蓮の、水に閉ぢられ」と見え、またお伽草子『毘沙門の本地』にも、「紅蓮大紅蓮の水に閉ぢられて歎くなり。」<sup>(23)</sup>という類似表現がある。五句目の「ながきよのやみ」も、『毘沙門の本地』に「焦熱大焦熱のしく<sup>し</sup>を西へ行き給ふべし。それを過ぎて長夜の闇とて、<sup>(24)</sup>と見える。

西行と寂然の歌が、經典、『往生要集』『地獄草紙』に見られる、慘たらしい世界をリアリティックに詠み込んでいるのに對し、良經の歌は地獄の具体的描写が欠け、観念的な描写にとどまり、当時の貴族たちの地獄に関する精神の一面<sup>(25)</sup>を推察することができるのである。

#### 餓鬼

②あさ夕のこをやしなひにすときげばくにすぐれてもかなしかるらん  
餓鬼道では、朝夕に五子を生んで生むたびに我が身を養うため、自分の子を食べると聞いているが、それは多くの苦のなかでも一番つらくて悲しいことであろう。

餓鬼道については、『正法念処經』(卷一六〇卷一七)の餓鬼品に詳しく記している。餓鬼の種類は、『大智度論』のように二種「弊鬼と餓鬼」

に分ける場合と、『瑜伽師地論』のように「又餓鬼趣略有三種」と三種に分けて説いているものもあり、經典によってその扱いは様々である。餓鬼の形体は、『六波羅蜜多經』卷三に「然彼餓鬼身如大山。頭如穹廬咽細針。其髮髮下垂覆兩肩。猶如利刀割切形体。」という、頭髮は垂れ下り、身体の色はどす黒く、瘦せおとろえているが腹は山の如くふれ、醜惡の限りを尽くしている。鎌倉初期の作と伝えられる『餓鬼草紙』は、それを明瞭に描写している。

『往生要集』には『正法念処經』に拠って、餓鬼道の鬼のさまざまを語っている。藤井智海氏は、『往生要集』に取り入れた餓鬼だけでも十七種類を数えることができるが、「国文学中に所出された餓鬼は慍むべき醜いものでなく寧ろ畏怖すべき異類として好箇の題目とされた事である。」と指摘され、その例として、『今昔物語』には「鳩槃荼鬼」・「牛頭鬼」・『宇治拾遺物語』には「羅刹鬼」・『古今著聞集』と『源平盛衰記』に「十羅刹」などを具体的に挙げられている。

②の歌を見ると、上句の「あさ夕のこをやしなひに」は、『俱舍論』に「餓鬼言二目連一曰昼生三子一夜食之云々」とあり、『六波羅蜜多經』には「復有餓鬼朝産五子随産食之。夜生五子随生随食。由懷飢餓未会暫飽。」などに説く、三六種ある餓鬼道のうち、二四番目の婆羅婆叉という餓鬼のことを指している。『往生要集』にも「或は鬼あり。晝夜におのおの五子を生むに、生むに随ひてこれを食へども、なほ常に飢ゑて乏しい。」と見え、『宝物集』にも餓鬼道の苦患を語るところで、「或はみづから脳をやぶりてくらひ、或は子をくらひて飢をたすく。我夜生五子随生皆自食 晝生五亦然 雖尽而不飽と申は是也。」とあって、朝夕に

五人ずつの子供を生んで、飢えの苦しみから我が子さえ食べざるを得ない、恐ろしい報いであるということは、当時の人々に強いショックを与えたと思われる。

また、絵解き台本として伝えられる『六道絵相略縁起』（聖衆來迎寺藏）には、「亦晝夜二子ヲウム／餓鬼在リ、娑婆ニ有リシ時ヨリ（可）  
「子ヲ」愛「スル」コト十倍／スレトモ、業ノ作為ニ依リ、生ニ随テ是ヲ食フ、<sup>(26)</sup>とあり、ここには晝夜に二子を生んでそれを食べる餓鬼と見え、昔継母となって先妻の子を憎んだり、妬んだ者がこの報いを受ける」と語っている。

そして、四句目の「くにくれども」については、従来の解釈が「国すぐれども」「供にすぐれども」「苦にすぐれども」というふうに、それぞれ分かれて注している。西行は『聞書集』なかで、「地獄多を見て」の連作のうち、「我かなしみのくのみをぼえて」（二二一）、「ならくがそののく」（二二三）、「むすぶごほりのく」（二二四）というふうに、地獄の苦しみから「苦」の語を何度も用いている点で、「苦にすぐれども」ととらえるべきであると思う。良経も西行と同様に、飢えの苦しみのため、生むたびに我が子を食べる餓鬼を、

身をせむるうえのこほりにたえかねてこをくもふみちぞわすれはてぬ  
る  
(良経・二九二)

とあって、『六道絵相略縁起』に語られる、子を愛すること十倍すれども「身をせむるうえ」にたえられず、「こをくもふみち」も忘れて、

我が子を食べざるを得ない苦しみを歌っている。

### 畜生

③かぐらうたにくさととりかうはいたけれど猶そのこまになることはうし

神楽歌に草取り飼う駒のことを詠んでいるが、草取り飼うのはすぐれてよいけれども、それでもやはりその駒になるのはつらいことである。

畜生とは、地獄・餓鬼と合わせて三悪道、三趣道ともいわれており、『正法念処経』（卷十八〜卷二十一）の畜生品に詳しく記されている。『往生要集』には、「別して論ずれば、三十四億の種類あれども、惣じて論ずれば三を出でず。一には禽類、二には獸類、三には虫類なり。」と、三種に分けて畜生の種類の数を取り上げ、慳貪と嫉妬の者が墜ちるとする。藤井智海氏は、『往生要集』に取り入れた畜生は三様に説き示されているが、「文学面に取り入れられた主なるものは龍である。」と述べられている。が、和歌においては、龍を詠んだものはあまり見当たらない。

③の畜生の歌を見ると、上句の「かぐらうたにくさととりかう」は、神楽歌に次のように詠まれている。

その駒ぞや 我に 我に草乞ふ 草は取り飼はむ 水は取り 草は取り飼はむや

西行が、この歌を踏まえて詠んでいるだろうことは確かである。それ

にしても、畜生の題でなぜ馬が選ばれたのであろうか。慈円も、「むくひかも人のかざりとなるからにむまと牛とを哀れとぞみる」（二七四五）と、「馬と牛」を素材にして詠んでいる。『往生要集』には、畜生道を説くところで、

象・馬・牛・驢・駱駝・驛等の如きは、或は鉄の鉤にてその脳を斬られ、或は鼻の中を穿たれ、或は轡を首に繋ぎ、身に常に重きを負ひて、もろもろの杖挿しんぼうを加へらる。ただ水・草を念ひて、余は知る所なし。

とあり、西行、慈円二人ともにこの部分を念頭において詠じたのか、よくわからない。ただ、西行の歌については、『宝物集』巻一に語られている「草を取り飼うことよって馬になったり、人に戻ったりする」<sup>(27)</sup>安楽国の商人の説話を西行は知っていたのではないだろうか、久保田淳氏は推察されている。なお、寂然も畜生道の歌で、

なくしかもゆるはたるもあはれなりにをなにかとおもひしるらん  
(寂然・一三)

と詠んでいるが、その素材となった「鹿と蜚」は、『二十五三昧式』と『六道講式』に出てくる「飛トビ空ソラ之鳥。不レ知三天ノ高一。（中略）山麓野麋。猶迷二東西一。」に拠ったものである。また、『宝物集』巻二にも、「夜もすがらもゆる蜚、日ぐらしなける蟬、夜もうらむる秋の虫、水にねふる冬の鶺鴒セウレイの、いづれか苦をまぬかるゝある。」とあり、『三時念

仏觀門式』にも同文が見える。

### 修羅

④よしなしなあらそふことをたてにしていかりをのみもむすぶ心は  
つまらないことだなあ。争うことをむねとおしたてて、怒りの種  
ばかり作り出す阿修羅の心は。

阿修羅は、絶え間なく悲惨な闘争を業とする鬼類の一種で、仏教の守護神である八部衆「天・章・夜叉・乾闥婆・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅迦・阿修羅」の一つに数えられたが、天界に住む帝釈天と常に戦うとされた。

五道とする経典では、先述したように、阿修羅を除いて説いているが、仏教で取り入れる前は、インドで古くから信仰を受けた神であり、呼吸あるいは靈魂の意味を持っていたといわれる。『往生要集』の阿修羅についての記述は、比較的簡単である。「須弥山の北の大海の底と、四大州の山中の岩石の間」という、阿修羅の二種の居住を記した後、常に怖れおののき、敵襲の不安に寸時も心休まない苦相を語っている。

この阿修羅と帝釈天との戦いは、『俱舍論』や『正法念処経』の諸説に由来するもので、特に『正法念処経』卷十八く卷二一では、畜生の一つとして阿修羅を説いて、帝釈天との戦いを次のように記している。

阿修羅軍馳趣天衆。互共闘戦。無量悩害。無量衆生見者大怖。無等憐乱。如是大戦。天阿修羅王。及其軍衆。互相攻伐。無量器仗。堅如金剛。共合闘戦。時天帝釈。雖見無量阿修羅衆在其前住。而不奪命。但欲破彼阿修羅衆。令退無余。時鉢呵婆毘摩質多羅阿修羅王。及其軍

衆。退散敗走。<sup>(29)</sup>

この戦いの勝負については、孝養など善行を積んだ人々が天上に多く生まれれば、天の力が強くなり阿修羅が敗れ、天上に生まれる人少なければ、天敗れることとなるわけである。

文学作品においては、阿修羅の性格上、当然軍記物語によく登場する。『源平盛衰記』卷一五に、「闘争合戦の場にして身を失つて修羅の悪所にも生まれ」とか、『平家物語』灌頂巻で、建礼門院が自己の一生を六道になぞらえる場面で、室山、水嶋の戦いに勝って、前途の希望も見えてきたのに、一の谷の敗戦で明けてもくられても絶え間ない戦いを「修羅の闘争、帝釈の諍も、かくやとこそおぼえさぶらひしか」と、語っている。また、『曾我物語』卷五「帝釈・修羅王たゝかひの事」や『太平記』卷一〇「鎌倉兵火事長崎文字武勇事」などにも見える。

④の歌を見ると、初句の「よしなしな」は、つまらないことで争うこと、「な」は詠嘆の意味。説教師の口調で他人に対して戒めるような姿勢が窺われる。下句の「いかりをのみもむすぶ心」とは、『往生要集』に「また日々三時に、苦具自ら来りて逼りて害し、種々に憂ひ苦しむこと」と見え、『二十五三昧式』『六道講式』にも、「常ニ含ニ瞋志」。鎮ハニ懐ケリ毒」というように、怒りや嫉妬、怨憎の心を常に保ち、人と争いばかり好むことに拠ったものである。寂然も西行と似たような詠みぶり

ひとをのみうらみそねみしむくひにはくるしきうみのそこにこそすめ

(寂然・一四)

とあり、上句に因を、下句に果をあてて因果応報を示し、西行の④の「よしなしな」と同様に、いわば説教師の口調で歌っている。「うみのそこ」は、『往生要集』に「須弥山の北、巨海の底」とあり、『法華経』法師功德品にも「諸阿修羅等 居在大海辺」<sup>31</sup>と見え、たぶんこれらに拠ったものである。慈円も、須弥山での帝釈天と争う阿修羅を「須弥のうへはめでたき山ときくしかど修羅のいくさぞ猶さはがしき」(二七四六)と詠んでいる。

人

⑤ ありがたき人になりけるかひありてさとむる心あらなん

受け難い人の身として人界に生まれた甲斐があって、その証しに、仏道の悟りを求める心があつてほしいものだ。

人道とは、六道のうち第五の世界、すなわち、我々が住む人間世界なのである。『往生要集』は、人間の世界を三つの相に分けて「一には不浄の相、二には苦の相、三には無常の相なり。」と記した上で、様々な經典を引用しながら、人道の眞の姿について詳しく説いている。六道を説く『大智度論』『大宝積経』『大般若経』『摩訶止観』等の、多くの經典も人道の三相を記しており、主に苦相を取り上げて、人界に生まれた証しとして仏道に勤めて、三世から早く出離すべきであることを説いている。

文学作品においては、藤井智海氏の言われるように、無常相が一番多

く取り上げられている。特に軍記物語によく看取され、枚挙に暇がないほどである。

⑤の歌を見ると、上句の「ありがたき人になりける」<sup>32</sup>は、『往生要集』に「人身を得ること甚だ難し。」とあり、『二十五三昧式』『六道講式』にも、「何<sub>ニ</sub>況ヤ人身難<sub>レ</sub>受<sub>ケ</sub>。仏法難<sub>レ</sub>値<sub>ト</sub>。」と見え、『今昔物語』巻二〇の一〇語にも、「人界は受け難し、仏法に値ふ事又それなりも難し。」という類似表現が語られており、歌の典拠を特定するのはむずかしいと思われる。例えば、慈円と良経の歌でも、

いづくよりも嬉しかりける契哉人と生まれて法にあひぬる

(慈円・二七四七)

ゆめのよに月日はかなくあけくれてまたはえがたき身をいかにせむ

(良経・二九五)

とあって、慈円は「人と生まれて法にあひぬる」とか、良経は「またはえがたき身」と詠んでおり、西行の上句と相通じる点から、当時の常識に近い観念的な言葉であったと考えられる。良経の歌は、人道の無常相をそのまま受け入れ、末句で「いかにせむ」と嘆いているような、感情を表にさらけ出している。それに比べて、西行の歌は「人」として生まれたことを積極的に肯定し、その人界に生まれた証しとして、仏道の悟りを求める心をもってほしいという往生への志向が看取され、五句目の「心あらなん」と自己から他者にも呼びかけるように、説教師の口調で詠んでいるのである。また、寂然も西行と似たような歌いぶり、

たれもみなつねなきよをばいとほなむ心あるをぞ人といふなる

(寂然・一五)

と詠んで、人の無常相を「つねなきよ」に喩えて、「たれもいとはなむ」というふうには、他者にも語りかけ、下句で「心あるをぞ人といふなる」と、西行と同様に説教師の口調で結んでいる。

天

⑥くものうへのたのしみとてもかひぞなきさてしもやがてすみしはて

ねば

天道に生まれ、雲の上の楽しみを極めたとしても甲斐がない。そのようにしてそのままいつまでも住み果てることができず、六道輪廻を繰り返して三悪道に墜ちることもあるのだから。

天道は、欲界・色界・無色界を合わせたもので、非常に広大無辺の世界であるといわれる。『往生要集』は、天道もまた願うべからざるものとして、「切利天の如きは、快樂極りなしといへども、命終に臨む時は五衰の相現す。」と、天人の臨終の際に五衰の相が現れることを説いている。この五衰は、『正法念処経』卷二三、『六波羅蜜多経』卷三、『仏本行集経』卷五、『瑜伽地論』卷四などに説かれているが、その五種の衰相については經典によって相違がある。特に『正法念処経』は、歡樂をきわめた後の五衰の苦しみを、「天上欲<sub>レ</sub>退時。心生<sub>二</sub>大苦惱<sub>一</sub>。地獄衆苦毒。十六不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>一。」と記し、地獄の苦しみより遙かに苦痛が大きいのだと説いている。

文学作品においても、天上での天人の五衰のことはよく扱われている。『本朝文粹』卷一四に「楽<sub>シ</sub>尽<sub>キチ</sub>哀<sub>シ</sub>来<sub>ル</sub> 天人<sub>モ</sub>猶<sub>ホ</sub>逢<sub>ヘリ</sub>五衰之日<sub>ニ</sub>」とあり、『平家物語』卷二「成親死去」の条には、「世の変はりゆく有り様は、たゞ天人の五衰に異ならず。」と見え、『曾我物語』卷一二にも、「およそ人間の八苦、天上の五衰、今にはじめぬ事にて候へども」等と、無常と結びつけて語られている。その他、『今昔物語』卷一の一語、『栄花物語』の「鶴の林」、お伽草子『俵藤太物語』、謡曲の『羽衣』などにも引用されている。

⑥の歌に移って見ると、天上での天人の五衰を詠んでいる。上句の「くものうへのたのしみ」については、『往生要集』には、欲界の六欲天のうち、下から第二番目の切利天での快樂を例に挙げて、五衰の相を示した後「当に知るべし、天上もまた楽ふべからざるものを」と説いており、『二十五三昧式』『六道講式』にも、「欲界ノ六天。未<sub>レ</sub>免<sub>二</sub>五衰之悲<sub>一</sub>。喜見城之勝妙ノ楽。」とあり、西行の歌もこれに拠ったのかと考えられる。『宝物集』卷三にも、「天上を申さば、快樂無数也といへども、つるに五衰をまぬかるゝ事なし。」と見える。このように、天上での楽しみもやがて消え、ここから三悪道に墜ちることもあり、天道もけつして樂園ではないことを、西行は下句で「さてしもやがてすみしはてねば」と、説教師の口調で詠んでいるわけである。なお、寂然、良経も西行と同様に天人の五衰を次のように詠んでいる。

身をかざるはなのかつらもおとろへてつゆきえはつるおほりかなしな

(寂然・一六)

たまかけしあとにはつゆをよきかへていろおとろふるあまのはごろも

(良経・二九六)

『往生要集』が示している五衰の相のうち、寂然は「一には、頭の上の花鬘忽ちに萎み」を、良経は「二には天衣、塵垢に著され」を、それぞれ詠み込んでいる。

#### 四 おわりに

以上、西行の六道歌を中心として、主に経典類及び『往生要集』のなかで、典拠を探りながら、寂然、良経、慈円の六道詠と結びつけて述べてきた。

この一連の歌群は、詞書が示すように十界のうち、六道の迷いの世界を詠んだものであり、その歌の典拠を明らかにすることは、西行の仏教思想的背景を推察することができる唯一な手掛りにもなると思われる。先述したように、同時代に生きた三人は「一念三千」<sup>(33)</sup>という天台の実相論とも係わりがある十界、十如是の歌がそれぞれの家集に収められている。それに対し、筆者の管見に入る限り、六道歌を詠んでいるのは西行だけである。

なぜ、西行は十界のうち、六道歌のみを詠んでいるのであろうか。その根拠として挙げられるのは、『往生要集』と『二十五三昧式』『六道講式』が示している六道のイメージや、『往生要集』に基づき、製作されたという六道絵であったと思われる。その観点で考える時、西行はさとりの世界である四聖界よりは、むしろ迷いの世界である六道により一層

の関心をよせていたのではなからうか。それは、歌の表現からも窺い知ることができるのである。

まず、三悪道のうち、①の地獄道において、良経の歌が露骨な描写を避けて観念的にとらえているのに対し、西行は大焦熱地獄の惨たらしい光景を生々しく描いて、罪人は「しぬる世もなく」永遠に生き返らせられて、責苦に直面するという説教的な意味を含ませている。また、②の餓鬼道においては、『正法念処経』が説く三六種の餓鬼道のうち、二四番目の婆羅婆叉という餓鬼を描き、朝夕に五人ずつの子供を生んで、飢えの苦しみから我が子を食べる、苦のなかでも一番つらい報いであると詠んでいる。寂然もこのようなあさましい餓鬼の苦しみは歌わなかった。③の畜生道では、身近な馬を取り上げ、轡を首につなぎ、重荷を負わされてむちを打たれる悲哀を描き出している。

次に、三善道の④⑤⑥の歌では、説教師の口調で他人に対して戒めるような姿勢が歌の表現で多く目立つ。④の修羅道においては、「よしなしくいかりをのみもむすぶ心は」という自問自答の表現から、俗世間の人々のつまらない争いを厳しい眼で見ている西行の姿が浮んでくるのである。そして、⑥の天道もけっして願うべきものでないと歌って、特に⑤の人道では、「人の身」として生を受けたことを積極的に肯定し、ここから三悪道に墜ちないよう、人界に生まれた証しに、仏道の悟りを求める心をもってほしいという往生への志向が看取され、「心あらなん」と自己から他者にも呼びかけるように詠み込んでいる。

この他、西行は『聞書集』に「地獄多を見て」の大連作を残しており、八大地獄の惨たらしい様相を、自己さらに衆生の業因と照らし合わ

せながら詠み上げ、墜地獄を己れにつきつけて、最後には地藏菩薩による救済を歌っている。こうした、西行の悪道や地獄に対する関心は、自己の罪障への深い自省とともに、悪道に苦しむ罪人への共感から生まれたものであると思われる。

注

- (1) 本稿において引用した西行の歌は、すべて久保田淳編『西行全集』(日本古典文学会、昭和五七)による。カッコ内の数字は歌番号である。なお、以下に挙げる『唯心房集』(書陵部蔵本)、『秋篠月清集』(定家本)、『拾玉集』(書陵部蔵本)は、和歌史文学会編『私家集大成 中世Ⅰ』(明治書院、昭和四九)により、その他の歌の引用は、『新編国歌大観』によった。また、經典・論疏などの引用は、『大正新修大藏經』、散文類はことわりがない限り、『日本古典文学大系』による。
- (2) 久保田淳『古典を讀む 山家集』(岩波書店、昭和五八)一四九頁。
- (3) 「十如是」は、『法華經』方便品に詳しく説かれている。久保田淳氏は、良経、定家、二条院讃岐の「十如是」の歌は、同機会に詠まれたものであるろうとし、『定家八代抄』に見える詞書「後京極撰政治家にて十如是の心をよみ侍りけるに、如是報」により、「実質的主催者は良経か」と推測されている。(『新古今和歌集全評釈』第八卷、講談社、昭和五二、五三九頁)。
- (4) 山辺習学氏によると、『根本説一切有部毘奈耶』第三四に、阿修羅を除いた、五趣生死輪廻図の描き方を説いていると述べられている。(『地獄の語』、講談社、昭和五六、五九〜六〇頁)。
- (5) 岩波文庫『法華經』(岩波書店、昭和三七)による。
- (6) 五趣は、五道ともいわれる。輪廻転生する五つのありかたで、阿修羅を除いた地獄・餓鬼・畜生・人間・天を指す。『六波羅蜜多經』卷三(大正藏八、八七六〜八七八)、『瑜伽師地論』卷四(大正藏三〇、二九四〜二九五)、『順正理論』卷二(大正藏二九、四五二)。
- (7) 『大智度論』卷三〇(大正藏二五、二八〇)。
- (8) 『六道絵相略縁起』(聖衆来迎寺蔵)『伝承文学資料集第十一輯』所収(伝

承文学研究会、昭和五八)。

- (9) 小松茂美氏は、現存する『餓鬼草紙』『地獄草紙』『病草紙』が、「もと蓮華王院の六道絵の一セットとして作られたもの」であると想定されている。(『餓鬼・地獄・病草紙と六道絵』『日本絵巻大成』七、中央公論社、昭和五二)。
- (10) 岩本裕『日本仏教語辞典』(平凡社、昭和六三)。
- (11) ひろさちや『仏教説話大系——地獄と極楽——』第二〇巻(すずき出版、昭和五八)一〇三〜一〇五頁。
- (12) 『源信』(日本思想大系、岩波書店、昭和四五)による。
- (13) 藤井智海『往生要集の文化的研究』(平楽寺書店、昭和五三)に、詳しい御調査があり、以下引用する藤井氏の御論は、すべてこの書による。
- (14) 高野辰之編『日本歌謡集成』卷四(春秋社、昭和三三)による。
- (15) 注(14) 前掲書参照。
- (16) 「仏名会」は、淳和天皇天長七年(八三〇)に行われたのが始まりで、宮中恒例の仏事となったのは承和五年(八三八)頃からだといわれる。速水侑氏によると、『往生要集』に先んじて、平安貴族社会における地獄思想形成に直接影響していたのは、この仏名会であろう。」と推察されている。(『地獄と極楽——『往生要集』と貴族社会——』、吉川弘文館、平成一〇、一七四頁)。
- (17) 家永三郎『地獄変と六道絵』『上代仏教思想史研究』(法蔵館、昭和四二)二九七頁。
- (18) 谷知子氏は、この地獄絵について、『起世経』の八大地獄に附属する十六別所のうち、十四番目の「劍樹、劍葉地獄を描いた絵を見たものである。」と推測されている(『西行・寂然・慈円・良経の六道の歌を読む』『和歌史の構想』和泉書院、平成二)が、私は『往生要集』に記している衆合地獄を描いた絵を見たものであると考えたい。(聖衆来迎寺十界図のうち、衆合地獄絵参照)。
- (19) かつて川田順氏は、この地獄絵連作を「東山長楽寺巨勢広高(広貴・弘高)筆の地獄絵によった」とされたが、片野達郎氏はこの連作と地獄絵との綿密な考証によって、否定的に考えられている。(『西行『聞書集』の「地獄絵を見て」について』『和歌文学研究』第二二、昭和四二・四)。

- (20) 注(9) 前掲書参照。
- (21) 畑中多忠『類題法文和歌集注解』全五巻(古典文庫、平成五)は、「大焦熱獄の事也。」と注している。
- (22) 注(2) 前掲書、一五六頁。
- (23) 岩波文庫『お伽草子』(昭和一一)二二七頁。
- (24) 注(23) 前掲書、二二二頁。
- (25) 家永三郎氏は、注(17) 前掲書で地獄絵・地獄屏風が本来もっている精神的意義と、現世的悦楽に強く耽溺していた平安貴族・知識人たちの生活の間には、超えがたい溝があったと推論された。
- (26) 注(8) 前掲書、三〇四頁。
- (27) 注(2) 前掲書、一五九〜一六一頁。
- (28) 阿修羅については、真保亨氏が『六道絵』の解説のところで詳しく述べられている。『六道絵』、毎日新聞社、昭和五二。
- (29) 『正法念処経』巻二二(大正蔵十七、一二四)。
- (30) また、『平家物語』巻三「有王」の条に、「諸阿修羅等、居住大海辺とて、修羅の三悪四趣は、深山大海のほとりにありと」と語って、『法華経』法師功德品の句を引用している。
- (31) 注(5) 前掲書。
- (32) 『聞書集』の「地獄多を見て」連作のうちにも、「うけがたき人のすがたにうかみいでゝこりずやたれも又しつむべき」(二〇一)と詠んでいる。
- (33) 「一念三千」とは、天台実相論の基本をなす観法であり、天台三大部である『摩訶止観』『法華玄義』に解説されている。つまり、十界がそれぞれ十界を具有して百界となり、百界がそれぞれ十界を具有して千如となる。千の世界は、五陰と衆生と国土に分かれて三千界となる。(梅原猛『地獄の思想——日本精神の——系譜』中央公論社、五九〜六二頁)。